

こうよう 紅葉の話

13日11月22年

ソン・デービス

昔々、山上の木に住んでいる精霊がいました。名前は紅葉もみじでした。彼女は葉をドレスのように纏っていて美しいですが、いつも悲しそうでした。話す人がいなかったなので、だんだん寂しくなってきました。

ある日、山に嵐が吹き荒れました。雷が山に落ちて地面に火をつけました。翌朝、紅葉もみじは地面に寝ている誰かを見つけました。起こすために紅葉もみじは彼の体に触れましたが、彼の肌はとても熱かったので、紅葉もみじは叫びました。彼は目を覚ましました。紅葉もみじが名前を聞くと「炎えん」と返事しました。

炎えんは「なぜ俺はここにいる？なぜ生きているの？」と聞きました。

紅葉もみじは「私にも分かりません。一緒に人生の意味を探しませんか」と答えました。

そして、二人は湖で泳いだり、平原で踊ったり、海辺で夕焼けを見たりしました。楽しかったですが、紅葉もみじのドレスの葉は脆く、炎えんの肌に触れられませんでした。

夜になって急に雨が降って来ました。炎えんにとって雨は危なかったです。避難所を探しましたが、何も見つけられませんでした。雨が痛すぎて炎えんは倒れこんでしまいました。紅葉もみじは自分の体で炎えんを守ってくれましたが、酷く火傷しました。彼が彼女にとって、人生の中で唯一のものだったので、痛みに関わらず彼女は守り続けました。すぐに紅葉もみじも倒れこんでしまいました。

翌日、二人の体から紅葉もみじの焼けたドレスのような赤い苗木が生えました。だから毎年秋、雨が降る時、紅葉もみじと炎えんの思い出のために木々が赤く色づきます。